

# かささぎ通信 第130号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 11月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年十月の「森三郎の作品を読む会」では、「角田川」(『雪  
「こんこんお寺の柿の木」1933.12)と「雪」(『赤い鳥』一九三三年八  
月号所収作)を読みました。

『雪「こんこんお寺の柿の木」』の中の「角田川」の冒頭は、竹久夢二  
の「をさなき夢」の一節から「夢の一つはかくなりき 青き頭巾をかぶ  
りたる 人買の背にないじやくり・・・」という詩から始まり、この作  
品のテーマを示しています。

話はいくつかの場面に分かれていますが、最初の場面では、すみだ  
川(本文中は平仮名表記)の岸を一人の男が小さな男の子の手を引い  
て歩いていきます。男の子は川面に浮かぶ「鳥」をとっておくれと男に  
しきりに頼みます。「左金吾ならとれる」と言い、そこから母のことを  
思い出す男の子とのやり取りから、次第にこの男が人買いで、男の子  
は母と引き離されたことが分かってきます。男の子は熱のために男に  
負ぶさったまま目を開けませんでした。

次の場面では子どもをさがし狂ったようにかけて来る母親が登場し  
ます。母親は川岸の若い柳の木の下に盛られている新しい土饅頭に気  
づき、母親の直感でそれが我が子の墓と悟ります。やはり男の子は人  
買いの男の背中そのまま息絶えたのだということが、読者にもここ  
ではっきりと分かる構成になっています。

タイトルの「角田川」、母親の口から出た「梅若」という子どもの名  
前、子どもが最後まで求めていた鳥を母は「都鳥」と呼んでいたこと  
からも、森三郎が謡曲「隅田川」に題材を求めたことが分かります。  
謡曲「隅田川」では隅田川の渡し守と母親との応答の中で、子どもが  
死んでしまい、土饅頭に葬られていることが分かります。子どもが直  
接登場するのは念仏を唱え鉦鼓を鳴らす母の前に亡霊として現われる  
場面だけです。亡霊となって現れる我が子を抱きしめる事も出来ない  
母子の悲哀が母親の立場を通して表現されています。しかし森三郎の  
「角田川」では熱に浮かされながら「鳥をとっておくれ」と繰り返

し、母親を求めるいたいけな男の子を描く前半部分に作者の力の注ぎ  
方が感じられます。また亡くなって星になった子どもを想い母親は星  
空を見上げます。そしてもうすぐ七つの子どもの年の数と同じ星の数  
を数えながら母親も意識を失っていきます。最後まで子どもが中心に  
描かれています。

子どもの最期も母親の最期も直接的な言葉で表しているわけではな  
く、「淡い悲しみがよく描かれている作品」だという感想が出ました。  
また作品の構成については「物語の展開が面白く、プロローグがこと  
に良いと思えました。それがエピローグに繋がる感じがしました」と  
いう感想も寄せられました。

この話の中にも展開の要所に三郎は歌を使っています。京の町の物  
売りの品目(ここではいろいろの瓜の名前)を並べた「やしようめ  
(優女)」の歌は、母子が供の左金吾と一緒に、事情があつて都から  
東にやって来たことを示唆しています。

前回読んだ『雪「こんこんお寺の柿の木」』の最初の所収作「雪「こん  
こんお寺の柿の木」」は、別れて暮らしていた和尚さんと小坊主が再び一  
緒に暮らすことになる、あたりまえの生活の温かみを滑稽の中に描い  
ている話でした。「角田川」の悲しみはその正反対のように見えます  
が、どちらも一九四三年という時代の中で三郎が生きていることの意味を  
考え描いた作品だという思いが強くなります。

当日読んだもう一作は『赤い鳥』に発表の「雪」ですが、母子を題  
材にしている点で共通していました。「雪」は小学校六年の男の子の一  
日の生活を母親への男の子の気持を中心に描いています(「かささぎ通  
信」No.28、82参照)。「反抗期の男の子の気持をうまく描いているね」  
という感想や、そういう時期の子育てを過ぎて来た大人の立場からの  
反応も出て、活発な会となりました。

次回予定 二〇二三年十二月八日(金)午後一時半~三時半

・「山彦」(『雪「こんこんお寺の柿の木」』1933.12)

・「銀作」(『赤い鳥』1933.5)